

# 浅野淳博著『ガラテヤ書簡』

(NTJ 新約聖書注解、日本キリスト教団出版局、2017年10月)

東 よしみ

2017年10月、宗教改革500年を記念する区切りの時に、ルターの信仰義認論に大きな影響を与えたガラテヤ書の注解書が、NTJ新約聖書注解シリーズの皮切りとして出版された。著者の浅野淳博氏は、国内外のパウロ研究をリードする研究者であり、同シリーズのローマ書簡注解の刊行を予定し、さらにT&T Clark Bloomsbury社が新しく刊行を開始する新約聖書の社会学的注解シリーズにおいて、コロサイ書簡注解を執筆している。NTJ新約聖書注解は、学問的な議論をふまえながら一般読者向けに日本語で書き下ろされるシリーズであり、共通する注解本体のフォーマットは、①翻訳②形態／構造／背景③注解④解説／考察からなる。①翻訳に関して、本書は「逐語訳」と「自然訳」という2種類の日本語訳を提示するが、これはシリーズ全体に共通するものではなく、本書(著者?)に独自のものである。逐語訳は「語の意味を厳密に逐った訳」である一方、自然訳は「日本語としてより自然な表現に寄せた訳」であり「意識的傾向」が強い(18頁)。また、シリーズを特徴づける④解説／考察は、当該聖書箇所の現代的な意義を考察する「適用」部分をも含む。

本書は、とりわけ英語圏の研究者との対話をふまえた最新の研究成果を反映する学術的な注解書であり、幅広いトピックを扱う補遺や巻末の参考文献表も充実している。同時に、本書は通常の注解書には見られない図や写真なども含み、終始分かりやすい文体で書かれている。④聖書箇所の解説／考察では、現代の日本におけるナショナリズムの問題などもとりあげられ、ガラテヤ書が現代日本社会の問題に対してもつ示唆が考察されて興味深い。本書は読み物としても楽しめる作りになっているので、全体を一読することを勧めたい。

著者は、E・P・サンダース以降の「パウロ研究の新しい視点」を反映してパウロとユダヤ教の連続性を前提としつつ、社会学的、人類学的アプローチを用いて民族アイデンティティに焦点をおくことで、パウロの独自性を鮮明にする。サンダースの研究により、律法主義的なユダヤ教と信仰義認論のキリスト教とを対立的にとらえる枠組みは過去のものとなり、その後のN・T・ライトやJ・D・G・ダンらの研究は、ユダヤ教とキリスト教の連続性を強調してきた。この潮流をふまえ、著者は原始教会を多様な第二神殿期ユダヤ教の一派である「ユダヤ教ナザレ派」として見るが、同時に

その民族アイデンティティ形成に着目することで、パウロの独自性をも明確にする。パウロの宣教原理は、自身の啓示体験を契機として、民族アイデンティティを「脱却」してこれを「相対化」し、ユダヤ人と異邦人とを同等としてとらえるものである(189-190頁)。また、パウロがガラテヤ書において批判する「律法の行い」とは、律法そのものではなく、「民族的奢り」(270頁)であり「選民的民族意識」(251頁)である(458-461頁も参照)。民族アイデンティティという切り口から、著者の議論はパウロの独自性を明確にすることに成功している。

残りの頁では、ガラテヤ書全体の理解に関わり、とりわけルター信仰義認論の理解を根底から問い直す意味をもつ、「ピステイス」(通常「信仰」と訳される)をめぐる問題に焦点を絞ることとする。属格の規定語を伴う用法、所謂「キリストのピステイス」に関して、これまで目的語属格(人がキリストに対してもつ信仰)と主語属格(キリストが神あるいは人に対してもつ信仰/信/誠実/真実)の主に2つの立場に分かれて議論がなされてきた。著者は、キリスト教史の研究者であるT・モルガンの研究成果をもとに、ピステイスをこれまでの論争の両方の立場をも含む多義的な概念としてとらえ、逐語訳では一貫してこれを「信頼性」と訳す。逐語訳と自然訳の2種類の訳語を用いて展開される著者の主張と、その議論の方向性が示唆するところを理解するために、読者が注意すべき点をまずは整理したい。

まず、ピステイス(及びその訳語である「信頼性」)は、その意味内容に「信頼関係」を含む概念である点に注意する必要がある。著者はモルガンの研究結果に基づき、ローマ帝政初期のギリシャ語とラテン語文献におけるピステイスに共通する基本的概念として「関係性——人と人、人と体制組織、人と神——を構築する際の主要素となる『信頼性』」を挙げる(232頁)。関係性構築と維持のための手段であり徳でもある「信頼性」が含む意味内容は、①信頼するという能動的動作②信頼する対象が信頼に値するという品性③信頼に値するものの具体的な性質である誠実、忠実である(233頁)。注意しなければいけない点は、ここで「信頼性」の意味内容として列挙はされないものの、「信頼関係」という「関係性」そのものがピステイスの意味内容に含まれる点である。それは、自然訳におけるピステイスの訳語に「信頼関係」が使われることから示される。ピステイスは自然訳では以下の3通りに訳される。①「信頼関係」(3:2, 5; 6:10) / 「神と人との信頼関係」(1:23) (4例) ②「信頼性」(3:7, 8, 9, 11, 12, 23 [2回], 24, 25, 26; 5:5, 6, 22) (13例) ③「誠実さ」(3:14, 22) / 「誠実な業」(2:16a, 16b, 20) (5例)。以上の用例が示すように、ピステイスは、信頼という動作から始まる「信頼関係」という双方向的な関係性そのものをも含む概念なのである。また②「信頼性」が採用される多くの場合も、その意味内容に信頼関係が含まれており、「信頼関係」の訳語の方がふさわしいケースが多いように評者には思われた。たとえば「律法は信頼性に基

づいていません」(3:12 自然訳)は、「律法は信頼できる性質をもっていない」という意味として誤解されかねないが、「律法は(神と人との)信頼関係に基づいていない」という意味として評者は理解した。

次に、上の③に含まれる、属格形の規定語を伴う「キリストのピステイス」の4例(2:16a, 16b, 20; 3:22)に関しても、その意味内容に「信頼関係」が含まれることに注意する必要がある(なお3:14は原文では属格を伴わないが、自然訳では「キリストの」が補われて訳される)。これらの用例の場合も、意味内容として「信頼関係」は列挙はされない(217頁)。また、著者はこれらの用例を自然訳では常に「誠実さ／誠実な業」と訳すことから、これまでの論争における主語的な解釈を採用しているように見えるかもしれない。しかし、著者の議論の方向性から評者が理解したところによれば、キリストのピステイスは、キリストの、神と人に対する誠実／信頼を意味すると同時に、神のキリストに対する誠実／信頼、人のキリストに対する誠実／信頼をも意味し、神とキリスト、人とキリストとの間に生じる双方向的な信頼関係そのものをも含意する多義的な概念なのである(特に236-237頁を参照)。

以上の点を指摘した上で、この問題に関する評者の応答を述べる。まず、「誠実な業」という訳語(自然訳)は、多義的なピステイスを、行為、とりわけ十字架に示された行為に限定しかねない訳語であるように思う。ピステイスが属格形の規定語を伴う4例は、「誠実さ」(3:22)を除き、自然訳ではすべて「誠実な業」(2:16a, 16b, 20)として、原文にはない「業」という語が補われて訳される。義認論で重要な2:16は以下のように訳される。「人はイエス・キリストが為した誠実な業をとおしてでなければ、律法の行いのみでは義とされないと知って、私たちがキリスト・イエスを信じたのです。それは律法の行いでなく、キリストの誠実な業によって義とされるためです」(2:16 自然訳、傍点は評者)。著者によれば、「キリストの誠実な業」は「品性の体現としての行動や姿勢」であり、その内容は「私たちの諸罪過のために自分を与えた」(1:4; 4:4-5 参照)ことに示される(217頁)。また、著者はいくつかの箇所では「誠実な業」を十字架と結びつける(「誠実な業としての十字架」[237頁]、「十字架におけるキリストの誠実な業」[471頁])。キリストの誠実が示された出来事としてパウロが十字架を重要視するということは明らかである。しかしながら、著者自身が述べるように、キリストの誠実は、キリストの「生き様と死に様」(228頁)の双方、キリストの人柄を含めたその存在自体においても現れたものであるだろう。「誠実な業」という訳語は、キリストの誠実を業という行為、とりわけ、十字架に示された行為に狭めかねないものである。これは、ピステイスの関係性としての側面や情緒的な側面を強調する著者の議論に沿わないように評者には思われた。

さらに、十字架に強調点においてピステイスを理解する著者の救済論と参与論の議

論において、復活に十分積極的な意味付けが与えられていないように評者には思われた。著者は、神の行為としての復活が十字架とともにパウロの思想の中心にあると述べ、「復活を看過したり、これを十字架と同一視したり、十字架に対して二義的に捉えること」を批判する（283頁）。しかしながら、著者の救済論の議論（276-283頁）において、復活に、十字架と区別した独自の役割が与えられているようには、評者には思われなかった。著者はピステイスの議論（232-237頁）において復活には言及しない。著者は十字架こそが、キリストのピステイスが示された場であり、神と人との関係性が回復された場であると考えようである（275頁）。しかしながら、神と人との関係性が真に回復されたのは、神がイエスを死者の中から蘇らせて義とした出来事、復活においてではないだろうか（ロマ4:24-25; 10:9; フィリ2:9-10などを参照）。また、参与論の議論（301-305頁）においても、ピステイスと復活に関してより発展した議論を聞きたい。「キリストへ参与し、その在り方を自ら生きぬく」（304頁）とは、人がキリストとの信頼関係に入ることをとおして、キリストと神との信頼関係に入り、これに参与することを意味するのではないだろうか。そして、パウロにとって、神とキリスト、神と人との信頼関係が回復される決定的な出来事は復活であるからこそ、ピステイスの議論の中で、パウロはキリストへの参与を復活の言語を用いて語るのではないだろうか（「私の内にキリストが生きている」[ガラ2:20 逐語訳／自然訳]、「キリストを着た」[ガラ3:27 逐語訳]）。復活は、神とキリスト、神と人との信頼関係が完全に回復される場であり、神の誠実が決定的に示される場ではないだろうか。

紙幅の関係上、十分な議論はできなかったが、双方向的な信頼関係を中心とする多義的な概念としてのピステイス理解は、この問題をめぐる従来の論争に新しい道を切り開くものである。ルターの信仰義認論から500年を経て、本書はこれまでの「信仰」理解を根底から揺さぶり、新たな「信仰義認」の解釈の可能性を拓く。聖書学を専門としない読者も、本書を手にとってその歴史的な意義を味わい、「信仰」が意味するところが何であるのかをあらためて考えて欲しい。